

シューマッハー経済学の再考 ④ スモールイズビューティフル：原子力は、暴力的技術

尾関 修

経済学は自然科学とは違い、よって立つ価値観により大きく異なる。フリッツ・シューマッハー（1911～1977年）は、仏教、キリスト教、ガンジーなどの価値観によって新しい経済学を作り上げた。私たちはシューマッハー経済学を学ぶことによって、仏陀やキリスト、ガンジーだったら現代の問題にどう答えたかを考えることができる。自分がシューマッハーといかに取り組んで来たかを振り返り、まず非暴力について考えて見たい。

93年末の石油危機のとき、これを警告したシューマッハーの本がベストセラーになった。「スモールイズビューティフル（小さいものは素晴らしい）」というタイトルはキリストの柔和な道を表しているが、仏陀やガンジーにも共通な非暴力の心をも表現している。シューマッハーは、環境問題や資源問題を論じる中で、技術を暴力的で生命を脅かすものと非暴力的で生命を支えるものに識別している。日本では、76年「人間復興の経済」（佑学社）と題し翻訳された。

英国の石炭公社の顧問だったシューマッハーは、エネルギー資源の超長期的需給予測に関心を払い、石油、石炭、天然ガスなどの化石燃料は有限で、浪費してはいけない自然資本であるとし、「原子力、救いか呪いか」と論じた。

偶然私は、三菱総研の産業技術部にいた77年に、東京電力原子力開発研究所から委託されたエネルギー資源の超長期需給予測を担当した。このとき初めてシューマッハーの原発問題の議論と向き合い、放射性廃棄物の処分や廃炉の解体など解決不能な環境問題を抱える原子力は、暴力的な技術であると認識した。

そこでシューマッハーに従って省エネルギーと再生可能エネルギー（自然エネルギー）という非暴力の技術の拡大可能性を最大限見込み、原発の問題点を考慮した結果、再生可能エネルギーの一次エネルギーに占める構成比は2020年で原子力を若干上回って10%強になる供給予測を出した。シューマッハーならば、事故の影響の大きな原子力の構成比を10%も認めることはなかったと思う。

76年にシューマッハーに触発された物理学者エイモリー・ロビンズが、米国における「ソフト・エネルギー・パス」を発表した。熱力学的に効率のよいエネルギーの需給構造に変えることによって、石油、石炭、天然ガス、原子力といったハード・エネルギーを、小型水力、風力・波力、太陽光・太陽熱、薪・バイオマス、温泉・地熱といった小型、分散型、地域的、非暴力的、再生可能なソフト・エネルギー（自然エネルギー）に長期的には置き換えることができるというものだった。ロビンズは、原発は核拡散を招くとしていたのでカーター大統領の目に止り、米国のエネルギー政策にも影響を与えた。

1979年に米国のスリーマイル島で原発事故が起きた。そこで三菱総研の産業技術部では日本におけるソフト・エネルギー・パスの可能性を調査するプロジェクトを立ちあげた。企業に参加してもらい、技術開発の現状を調査した結果、エネルギー需給構造を地域的、分散的に変えることで、ソフト・エネルギー・パスは日本でも十分可能であるとの結論になった。

当時の通産省にはムーンライト（省エネルギー）計画やサンシャイン（自然エネルギー）計画があり、体制も整っていた。シューマッハー経済学の価値観は、巨大主義に進む日本の技術にも、仏陀やキリスト、ガンジーが重んじた非暴力の方向を求めている。

スモールイズビューティフルとは自然界の調和法則を無視した現代の技術の方向転換を求めているのである。ロビンズが80年に来日した時には講演会を聞いて歩いた。電力会社も含め広い階層の反響を呼んだことは驚きだった。この熱気が続いているならば、暴力的で生命を脅かす原発拡大の方向を変えることもできたのではないかと残念でならない。